ISSN 0027-9153

月報

国立国会図書館

図書館、市民、社会：知識の合流
　世界図書館・情報会議　第80回国際図書館連盟（IFLA）年次大会

子どもの探究活動と図書館の可能性
　～「調べものの部屋」開室に向けた調査プロジェクト講演会から～

世界図書館紀行　ストックホルム

2014.12
No.645

国立国会図書館利用案内

東京本館

所　在　地　〒100-8924　東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号　03(3581)2331
利用案内　03(3506)3300(音声サービス)
ホームページ　http://www.ndl.go.jp/
利用できる人　満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料　和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間　月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00
※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は 17:00までです。
資料請求受付★　月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00
※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。
即日複写受付　月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00
後日郵送複写受付★　月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30
★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館　利用者サービス部　サービス運営課　03(3581)2331　内線25211

関西館

所　在　地　〒619-0287　京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号　0774(98)1200(音声サービス)
ホームページ　http://www.ndl.go.jp/
利用できる人　満18歳以上の方
ただし、満18歳未満の方には、個別に相談に応じています。詳しくはホームページをご覧ください。
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料　和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、
科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間　月～土曜日 10:00～18:00
資料請求受付★　月～土曜日 10:00～17:15
セルフ複写受付　月～土曜日 10:00～17:30
即日複写受付　月～土曜日 10:00～17:00
後日郵送複写受付★　月～土曜日 10:00～17:45
★登録利用者限定のサービスです。

■見学のお申込み／国立国会図書館　関西館　総務課　0774(98)1224［直通］

国際子ども図書館

所　在　地　〒110-0007　東京都台東区上野公園12-49
電話番号　03(3827)2053
利用案内　03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ　http://www.kodomo.go.jp/
利用できる人　どなたでも利用できます。
資料の利用　館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日　月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料　国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間　火～日曜日 9:30～17:00　※1階子どものへや、世界を知るへや、3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。
第一・第二資料室の利用時間　閲覧時間　火～土曜日 9:30～17:00　資料請求受付　火～土曜日 9:30～16:30
複写サービス時間　即日複写受付　火～日曜日 10:00～16:00　後日郵送複写受付　火～日曜日 10:00～16:30
複写製品引渡し　火～日曜日 10:30～12:00　13:00～16:30

■見学のお申込み／国立国会図書館　国際子ども図書館　03(3827)2053［代表］

12 December

CONTENTS

02 トラスト王のコレクション・カタログ
Catalogue of the collection of watches, the property of J. Pierpont Morgan
今月の一冊　国立国会図書館の蔵書から

04 図書館、市民、社会：知識の合流
世界図書館・情報会議　第80回国際図書館連盟（IFLA）年次大会

16 子どもの探求活動と図書館の可能性
～「調べものの部屋」開室に向けた調査プロジェクト講演会から～

20 世界図書館紀行　ストックホルム

15 館内スコープ
海外と日本をつなぐ！　国立国会図書館の国際協力活動

27 本屋にない本
○『図書館とともに　キハラ100年の歩み』

28 NDL NEWS
○新副館長就任
○おもな人事

29 お知らせ
○電子展示会「近代日本とフランス―憧れ、出会い、交流」
○国際シンポジウム「デジタル文化資源の情報基盤を目指して：Europeanaと国立国会図書館サーチ」
○資料のデジタル化に伴い原資料の利用を停止しています
○本の万華鏡（第17回）「日本のだし文化とうま味の発見」
○平成26年度子ども読書連携フォーラム
○新刊案内　国立国会図書館の編集・刊行物

35 『国立国会図書館月報』年間索引

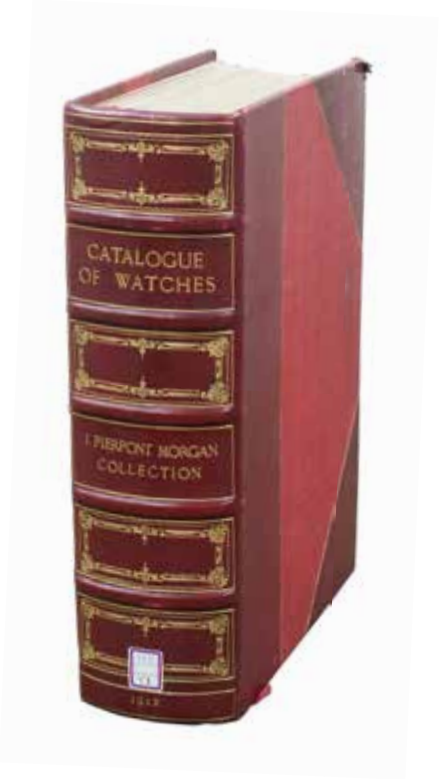
今月の一冊 December

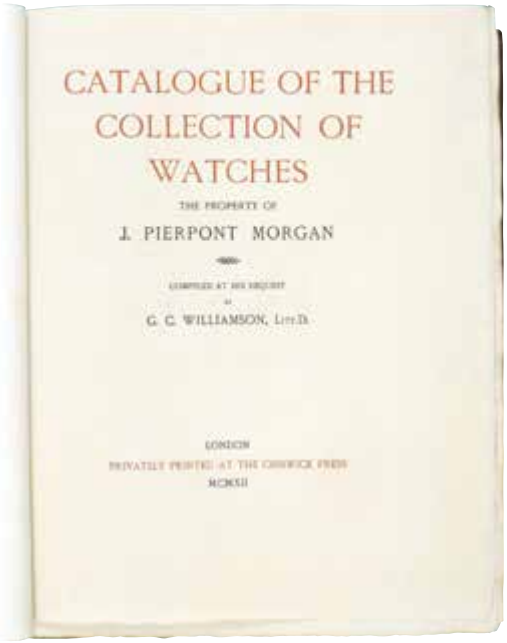
国立国会図書館の蔵書から

トラスト王のコレクション・カタログ

Catalogue of the collection of watches, the property of J. Pierpont Morgan

石田　暁子





標題紙

蔵書票

ジョン・ピアポント・モルガン氏
Morgan the magnificent; the life of J. Pierpont Morgan [1930] 口絵より

Catalogue of the collection of watches, the property of J. Pierpont Morgan; compiled at his request by G. C. Williamson, LITT. D.
London : Priv. print. at the Chiswick press, 1912.
<請求記号　VF6-Y1>

本書は、国立国会図書館が昭和62（1987）年に寄贈を受けた「堀田両平コレクション」のうちの1冊である。

堀田両平（1913-1989）は明治12（1879）年に創業された堀田時計店（現・株式会社ホッタ）の4代目社長で、古時計や、時計・暦・宝石関連文献の蒐集家であった。

コレクションには、時計の歴史書・技術書などのほか、商品カタログや販売マニュアル、古暦、時計を題材とした錦絵、時計を扱う文芸書など、幅広い分野の和洋文献が集められており、時計研究のための貴重な資料群となっているが、その中でも堀田氏が白眉としたのが本書である。

モルガン財閥の創始者で、世界経済に大きな影響力を持つ資本家であった、ジョン・ピアポント・モルガン（John Pierpont Morgan 1837-1913）は、美術品のコレクターとしても著名であった。

モルガンは蒐集した美術品について、ジャンルごとにカタログを作成させたが、それらは内容のみならず、印刷・造本においても優れていることが知られており、クリーブランド美術館では1918年に、モルガンのカタログを対象とする展覧会も開かれた[1]。

*Catalogue of the collection of watches*の完成は当時、新聞紙上でも報じられた[2]。記事には、本文に羊皮紙を用いたものが15部、和紙（Japanese vellum）を用いたものが20部、手漉き紙を用いたものが45部作成されたとある。羊皮紙版手彩色のものは、過去にイギリスで作られた最も豪華な書籍のひとつと評され、うち1冊はイギリス国王に献呈されたという。一般頒布は行わず、すべてモルガンの関係者や、主要な図書館・美術館に贈られたようである。当館所蔵分は手漉き紙

1　Catalogues of the Morgan Collections. *The Bulletin of the Cleveland Museum of art.* Vol.5, No.2/3 (Feb.-Mar.,1918), pp.29-33

2　MR. PIERPONT MORGAN'S COLLECTION OF WATCHES. *The Times*(1912, November 23), p.11
MR. MORGAN'S WATCHES; The Superb Catalogue of a Collection That Has No Equal. *The New York Times*(1912, November 25), p.12

17世紀初頭の作品。リモージュエナメルで装飾された時計は非常に珍しいという。
（カタログ中 No.129）

書籍型のケースに入った時計の図版と、その解説。（No.228）

1560年頃のイギリスの時計。オリジナルの革製ケースつき。（No.126）

堀田両平コレクションは、東京本館でご利用いただけます。
http://www.ndl.go.jp/jp/service/tokyo/books_section/data.html#C03

堀田両平氏　『ホッタ小史』1990　口絵より

使用のものだが、既定の45部のほかに著者用として5部刷られたうちのひとつで、no.47の番号が振られている。また表紙裏には、イギリスの実業家・政治家である、Weetman Dickinson Pearson（1856-1927）の蔵書票が貼られている。

本書の編者、George Charles Williamson（1858-1942）はイギリスの美術史家で、ほかにも2種類、モルガンのコレクション・カタログを編集している[3]。

本書には、16世紀から18世紀にかけてフランス・イギリス・ドイツなどで作成された、242点のWatches（懐中時計などの携帯できる時計）が収録されているが、作品は国ごと・地域ごと・製作者ごとに配列され、各々に製作者の経歴、製作年、機構やケースの特徴などに関する解説が付されている。モルガンの時計コレクションは、主にCarl Marfels（1854-1929）およびFrederic George Hilton Price（1842-1909）の蒐集品に由来するため、それら旧蔵者に関する記述もある。

写真製版による図版92点がついており、羊皮紙版ではこれに手作業で彩色と金銀箔が施されて、実物の時計と見紛うばかりとのことだが、単色版の図版も緻密で美しい。巻頭には、編者による時計史の概説や時計関連文献リストが掲載されており、詳細な解説文と相まって、本書を時計研究書としても価値あるものとしている。

モルガンは長くメトロポリタン美術館の役員を務め、晩年には理事長となって館の発展に寄与した。没後、遺された美術品の一部は同館に寄贈され、本書に掲載の時計も同館ウェブサイト上で見ることができる[4]。

（いしだ　あきこ
利用者サービス部サービス運営課）

3　*Catalogue of the collection of miniatures the property of J. Pierpont Morgan.* (4v. 1906-08) / *Catalogue of the collection of Jewels and Precious Works of Art, the property of J. Pierpont Morgan.* (1910)

4　http://www.metmuseum.org/collection/the-collection-online

【参考文献】
● *The Metropolitan Museum of Art : guide to the loan exhibition of the J. Pierpont Morgan collection.* (1914)
＜請求記号　233-112＞
●岩淵潤子著　『大富豪たちの美術館：アメリカ・パトロンからの贈り物』PHP研究所　1995
＜請求記号K251-E72＞
●小野沢うばら「寄贈二話」（国立国会図書館月報319号 1987.10, p.25）

IFLA 2014 LYON

IFLA World Library and Information Congress
80th IFLA General Conference and Assembly
Libraries, Citizens, Societies: Confluence for Knowledge

図書館、市民、社会：知識の合流

世界図書館・情報会議
第80回国際図書館連盟（IFLA）年次大会

BIBLIOTHÈQUE MUNICIPALE DE LYON

IFLA は、1927 年に創設された図書館および情報サービスに関する世界最大の組織です。テーマ別に設けられた 40 以上の分科会や、資料保存、著作権等法律問題といった戦略プログラムなどを通じて世界の図書館界の様々な課題に取り組んでおり、毎年、世界各国で大会を開催し、活動報告、意見交換や交流活動を行っています。

今年の IFLA 大会は、「図書館、市民、社会：知識の合流（Libraries, Citizens, Societies: Confluence for Knowledge）」のテーマのもと、8 月 16 日から 22 日にかけてフランスのリヨンで開催されました。132 か国から 3,983 名が参加し、参加者数の上位 3 か国はフランス 1,051 名、米国 415 名、ドイツ 182 名で、日本からは国立国会図書館からの代表団 8 名を含む 55 名が参加しました。

当館の代表団は、各分科会によるセッションやサテライトミーティングにおいて、報告や参加者との意見交換を行いました。また、分科会の常任委員等を務める者は所属分科会のセッションの運営に携わり、大会中に開かれた常任委員会に出席して今後の活動についての協議に加わりました。

8 月 21 日に行われた閉会式では、2015 年の大会開催地ケープタウン（南アフリカ）による招待挨拶があり、続いて 2016 年の大会がコロンバス（米国・オハイオ州）で開催されることが発表されました。

本稿では、当館代表団が参加した会議、分科会などについて報告します。

（国立国会図書館 IFLA リヨン大会代表団）

国立図書館長会議（CDNL）

8月19日に2014年国立図書館長会議（CDNL）[1]がリヨン市庁舎において開催され、51機関から92人が参加しました。当館からは館長代理として池本幸雄副館長（当時）が出席しました。

今回は、2月にジョン・ツェベ議長（南アフリカ国立図書館長）が任期途中で辞任したことから、次期議長及び副議長（定員2名）の選挙が行われました。いずれも立候補者が定員内であったため、議長にはカイ・エクホルム フィンランド国立図書館長、副議長にはマリー・クリスティン・ドフィー スイス国立図書館長とベリンダ・トールシー・クリーティー・ラムナウス モーリシャス国立図書館長が賛成の拍手をもって選出されました。

また、「国内及び国際的な協力のツールとしてのデジタル化」と題して、ロリー・キーティング英国図書館長をモデレータとして、Europeana、ラテンアメリカ遺産のデジタル図書館、ワールドデジタルライブラリー、フランス語圏デジタルネットワークの各事例が紹介されました。

次いで、①著作権が保護された資料（孤児作品含む）へのアクセス促進、②文化遺産と自然災害・人的災害によるリスク、③デジタル遺産の保存、という3つのテーマに分かれてグループディスカッションが行われ、当館は、グループ③に参加しました。「ますます高度につながった世界において、我々が情報にアクセスし、利用し、その恩恵を受けられるよう、デジタル資源の長期的持続可能性を保証するために国立図書館はどのような役割を果たすべきか」という課題に基づいて討議を行い、グループ③は、次の5点を確認し、全体会議に報告しました。

①法的、戦略的および政策的枠組み―国立図書館こそが保存の役割を担い、かつ主導していくことが必要

②適切な人材の確保―いかに育成し、または外部から獲得するか

③適切なツールとプロセスの保持（場合によっては民間部門から）

④ネットワーク、協力こそが成功の鍵

⑤技術変革への適応（クラウド、ビッグデータ、頑健性、スケーラビリティ）

今後は、他のグループの検討成果も加えて、IFLAにおいてこの報告が活用されるよう働きかけることとなっています。

CDNLは、各国内には類縁機関がないことが多い国立図書館が、年に一度顔を合わせて意見や情報を直接交換できる貴重な場であることが再確認できました。（秋山）

1 http://www.cdnl.info/

情報技術分科会、資料保存分科会、国立図書館分科会合同セッション

8 月 18 日に開催された合同分科会セッションは、「電子書籍のデジタル保存　図書館におけるベストプラクティス」[1] をテーマに行われました。

この合同セッションにおいて、当館は「国立国会図書館によるオンライン資料収集の取り組み」[2] と題して、インターネット等を介して流通している民間の無償・DRM（技術的制限手段）なしオンライン資料の制度収集開始までの経緯と現状、今後予定している有償オンライン資料収集の実証実験事業案について報告しました。そのほか、フランス国立図書館（電子書籍：電子か本か？電子書籍への納本制度の拡張）、ドイツ国立図書館（大規模なデータ・資料への対処：電子書籍の収集保存のための解決方法としての自動化ワークフロー）、クロアチアの国立図書館・大学図書館（電子書籍の取り込みモジュール）および中国国家図書館（電子書籍の保存実践）における電子書籍の収集・保存等について、法的、技術的、組織的観点から現状と課題について報告が行われました。

有償の民間電子書籍の納本制度がすでに運用段階にあるフランス国立図書館による報告は、当館にとっても示唆に富むものでした。すなわち、制度設計・運用に際し、国内主要出版社団体や文化省を利害関係者と位置付けた上で協力関係を構築したこと、自動収集に限らず出版社側からの能動的な納入も行われており、また流通業者（電子取次）を活用していること、総括的な教訓として、①既存のツールや手続の上に構築すること、②常にスケーラビリティ（拡張性）の課題を意識すること（数十万のコンテンツに対処する必要があるため）、③将来にわたり解決できない課題があることを認め、実際的で柔軟な判断を行うこと、④利害関係者間の意思疎通が何よりも重要で、しかも時間がかかるものと覚悟すべきことが挙げられていました。（秋山）

国立図書館分科会

8 月 18 日に「デジタル時代における国立国会図書館と文化遺産」[3] と題したセッションが行われました。フランス国立図書館からはウェブサイトの選択的収集、また英国図書館からはソーシャルメディア（SNS）の契約に基づく収集、ノルウェー国立図書館からは電子新聞の納本制度などが報告されました。

モニカ・ピント分科会議長は、先の合同分科会セッションも踏まえた総括コメントとして、デジタル時代の国立図書館にとって「選択と協力」が共通した課題となっていることを指摘しました。すなわち、選択とは、紙の納本制度にならった網羅的収集ではなく、電子出版物に適合した選択的な収集を、また協力とは、図書館以外の著作権法を担当する行政部門や、出版社、著作者などの利害関係者とのより強固な協力関係を構築することで、はじめて国立図書館は電子書籍を含むデジタル遺産を収集し、保存することが可能になるというものです。（秋山）

1 http://conference.ifla.org/past-wlic/2014/ifla80/node/304.html
2 http://library.ifla.org/886/
3 http://conference.ifla.org/past-wlic/2014/ifla80/node/324.htm

議会図書館の過去と未来

議会のための図書館・調査サービス分科会（議会図書館分科会）第30回プレコンファレンスは、8月12日から15日まで、フランス国民議会（下院）を中心に開催されました[1]。テーマは、「議会図書館：過去と未来」（The Parliamentary Libraries: Past and Future）でした。約70の国、地域、国際機関から、過去最多となる150名近い参加がありました。

会議は、フランス議会両院及び両院図書館の見学、フランス議会からの報告、各国からの報告という構成でした。下院はブルボン宮殿、上院はリュクサンブール宮殿にあり、両者は離れた場所にあります。両院の図書館とも、他の国の議会図書館のような調査機能は持たず、議会に対する図書館サービスと議会に関する文書館としてのサービスを提供しています。フランス議会からは、立法過程の概要、2008年の憲法改正等により強化された議会の行政監視機能、両院図書館の歴史や所蔵する貴重書や文書に関する報告が行われました。

各国からは、「進化する組織的環境の下での議員サービス」、「情報・調査の成果物を改善するための外部パートナーとの協力」、「新たな課題に対応するためのサービス評価･戦略的計画･協力」等のセッションで、議会への調査サービスや図書館サービスの現状や課題、組織改革への取り組み等の報告が行われました。

EUでは欧州議会の立法権限の拡大に伴い、2013年11月にこれまでの欧州議会の図書館部門を改組して新たな欧州議会調査局（European Parliamentary Research Service: EPRS）を設置し、政策の評価分析やシンクタンク的機能を強化しています。

日本からは、筆者が「立法府のブレーン機能の強化」と題して、当館調査及び立法考査局の総合調査や科学技術調査プロジェクト等の外部有識者との連携協力による調査の概要を報告しました。調査テーマの選定方法や調査手法等、多数の質問やコメントが寄せられました。オーストラリアや韓国からは、財政事情が厳しい状況のもとで調査サービスと図書館サービスの連携強化等の事例が報告されました。また、小グループに分かれて、議員満足度向上策について各国の取り組みを討論するワークショップも開催されました。各国とも一層の議員満足度の向上を目指して様々な努力をしていることが印象的でした。

議会図書館分科会では、現在、議会調査サービスのガイドラインを策定しています。2015年に列国議会同盟（IPU）と共同で刊行される予定です。（廣瀬）

1 http://preifla2014-en.assemblee-nationale.fr/

「星の王子さま」の作者サンテグジュペリ（Antoine de Saint-Exupéry, 1900-1944）はリヨン出身。彼がリヨンに暮らしたのは3歳までなので、市民にとってはさほど親しみのある人物ではないようですが、2000年の生誕100周年を機に、リヨン空港はサトラス空港からサンテグジュペリ空港に改称し、リヨン市の中心ベルクール広場には星の王子さまがそっと肩に手を置く彼の銅像が建ち、その近くにある通りもアルフォンス・フォシェ通りからアントワーヌ・ド・サンテグジュペリ通りと改称しました。実は彼の生誕地はこの通りの8番地、銅像から100mもないところにあって銘板も取り付けられているのですが、それに気づく人はほとんどいないようです。

リヨンの街の中にはいくつも度肝を抜くような壁画が描かれていて、中でもユネスコ世界遺産である旧市街の対岸にある「街の図書館」と「リヨンっ子たちのフレスコ画」は多くの人がカメラを向ける名所となっていますが、後者のベランダにも星の王子さまと並んだサンテグジュペリが描かれています。ただし、この王子さまは産みの親よりも、隣の部屋から顔をのぞかせたギニョール（リヨン発祥の指人形劇）の方に気を取られています。（西尾）

先日世界遺産に指定された富岡製糸場の開設時には、リヨンからお雇い外国人技師ブリューナ（Paul Brunat, 1840-1908）と共に日本人の背丈に合わせた紡織機が送られてきました。1860年代、カイコの微粒子病がヨーロッパ全土に蔓延し、絹織物の街リヨンにも壊滅的打撃を与えました（のちにパスツールが病原体と治療法を発見）。そこで良質な生糸と丈夫なカイコの供給地として日本が注目されたのですが、近代国家としてよちよち歩きを始めたばかりの当時の日本ではとても需要に応じきれません。そんな両者の思惑が合致、現地で大量生産すべくリヨンの技術で富岡製糸場は産声をあげたのです。

かつて広がっていた桑畑はブドウ農場（リヨン周辺はワインの銘柄コート・ド・ローヌの産地）に塗り替わり、リヨンの絹織物業者もいまや数軒を残すのみですが、IFLA会場の一角に設けられたリヨン市広報コーナーに、立派な白髭を蓄えた工房のご主人がブースを出展していました。もぞもぞうごめくカイコくんたちを、遠巻きに気味悪がる人と目を輝かせて眺める人、反応ははっきり分かれていました。（西尾）

書誌調整における典拠の重要性
書誌分科会ほか

書誌分科会常任委員会では、ここ数年進めている全国書誌に係る指針の改訂を中心に議論しました。改訂版は“Best Practice for National Bibliographic Agencies in a Digital Age”と題し、指針に則した各国の事例を集積し、分科会ウェブサイトに掲載する予定です。2015年8月公開が目標です。また改訂版では、全国書誌における典拠コントロールの重要性を踏まえ、狭義の書誌のみならず典拠に関する記述も充実させていきます。

電子書籍等オンライン資料の全国書誌収録促進も、書誌分科会の課題です。全国書誌は、各国の納本制度等によって収集された資料に基づいて作成されます。収録促進には、各国の納本制度等においてオンライン資料の収集を定める等の対応が必要となります。そのため来年のIFLA年次大会のオープンセッションでは、電子書籍等オンライン資料の納本制度と全国書誌をテーマにプログラムを組むこととしました。

今年の大会では、IFLAにおける全ての書誌関係分科会等（目録分科会、書誌分科会、分類・索引分科会およびUNIMARC戦略プログラム）が共催し、国際書誌調整（UBC）をテーマにオープンセッションを行いました。5時間にわたって、UBCをめぐる様々なテーマのペーパーが発表されました。OCLCからの基調報告で典拠の意義が強調され、また、フランス国立図書館からの報告で「典拠コントロールは戦略的ツール」であると主張される等、書誌調整における典拠の重要性について再認識させられるものでした。

IFLA年次大会開始の前々日8月14日には、パリのフランス国立図書館で開催されたIFLAセマンティックウェブ研究会・情報技術分科会共催サテライトミーティングに出席しました。“Linked Data in Libraries: Let's make it happen!”と題し、図書館とLinked Dataをテーマに行われました。

筆者は、典拠データのLinked Data提供の実践例として、国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス（Web NDL Authorities）について発表しました。参加者には西洋諸国外での実践例として興味深くとらえられ、特に、Web NDL Authoritiesにおける国立国会図書館件名標目表（NDLSH）と米国議会図書館件名標目表（LCSH）とのリンクは好評を得ました。

大会開始の前日8月15日には、リヨンで開催されたバーチャル国際典拠ファイル（VIAF）評議会会議にも出席しました。会議では、現況報告の後、今後の計画を議論しました。最後にLinked Data戦略を議事とし、この中で、前述のパリでのサテライトミーティングが紹介されましたので、当館からペーパーを発表したことを報告しました。

当館のWeb NDL Authoritiesは、ウェブ環境に適した典拠データの提供として先駆的な実践例です。サテライトミーティングで好評を得たこのWeb NDL Authoritiesを、さらにアピールしていく必要があると感じました。また、当館は、東アジア初のVIAF参加機関であり、評議会会議に毎年出席し、典拠の側面から国際的な書誌調整に参画しています。Web NDL AuthoritiesとVIAFを手掛かりとし、IFLA等を通じて、今後も国際的な書誌調整に参加していくことが可能ですし、また、参加していくべきだと考えます。（大柴）

予防的保存　―より経済的な保存のために
資料保存分科会、資料保存戦略プログラム

IFLA で資料保存関係を担当しているのは、資料保存分科会と資料保存戦略プログラム（Strategic Programme on Preservation and Conservation 略称 PAC）です。前者は 20 人の専門家からなる常任委員会が、後者は世界各地の 13 の国立図書館に置かれた PAC センターが中心になって、活動しています（当館は PAC アジア地域センターです）。IFLA 年次大会での両グループのセッションやビジネスミーティングから、資料保存の国際的なトレンドが浮かび上がってきます。今日の資料保存業務のカバー範囲は現物保存とデジタル保存の両方にわたること、状況に応じてそのバランスを考慮する必要があることが、随所で語られました。また、資料やデータが壊れてから対応するよりも、より経済的な対策として「予防的保存」の重要性が改めて強調されていました。

(1) 資料保存分科会セッション「コレクションを生きながらえさせるために：予防的保存の方針と実際」[1]

当館からは筆者が、日本の高温多湿な気候、かつ 24 時間空調の実施が困難という状況下での環境管理の苦労と工夫について、書庫のカビ被害への対応事例を基に報告しました。オランダ王立図書館からは、同館で実施した大規模マイグレーション―2003 年から運用していたデジタルアーカイブ e-Depot から新しいシステムへの移行―について紹介されました。今回の移行の対象は、保管していたファイルの半分にあたる約 500 万ファイルでしたが、移行に丸 1 年かかったそうです[2]。

書庫やデジタルアーカイブという「器」にいったん保管すれば長期保存できるというわけではなく、器自体の維持管理や更新も必要であるということが、デジタル・アナログ両面から具体的・実務的に語られたほか、保存協力の重要性について（ドイツ）、予防的保存の考え方の整理（イタリア）といった発表もあり、タイトルどおり理論と実践がバランスよく含まれたプログラムでした。

(2) PAC ビジネスミーティング

PAC は、国際センターが全体調整を担い、各センターが地域の事情に合わせた活動を行うという形で活動してきましたが、予算削減の影響により、2013 年末にフランス国立図書館が国際センター業務から撤退しました。同館の撤退申し出以降、PAC 関係者でその後の運営方法について検討してきましたが、新たに国際センターに名乗りを挙げる図書館はなく、過渡期の対応として 2014 年 1 月以降は IFLA 本部が調整業務を行っています。

本部としては、PAC 活動を以前より均質なものにしたい意向のようですが、資料保存は地域の社会・経済状況により課題が異なることが多く、ある地域で 20 年前に取り組まれていた課題が、別の地域では焦眉の急であったりします。新しい体制下で、IFLA 全体の組織目標に沿いつつ、いかに地域の多様性とニーズに応える保存協力活動を推進していけるか、まだまだ議論は途上です。（小林）

1 http://conference.ifla.org/past-wlic/2014/ifla80/node/406.html
2 残りの半分は電子ジャーナルで、出版社が新システムにリロードしてくれたため、図書館での移行作業は不要であったとのこと。

米国議会図書館の
PAC北米センター担当者と

閉会式の翌日、フランス国立図書館の資料保存部門を見学しました。先方指定の待合わせ場所は、「西口ホールで会おう。大きな地球儀があるからすぐわかる。」

フランソワ・ミッテラン館の西口を入って荷物検査スペースを抜けて向こうを見やると…巨大な球体が 2 つ浮かんだ、何やら薄暗くて幽玄な空間。同館自慢の常設展示「コロネリの地球儀・天球儀」です。直径約 4 メートル、重さが 2 トンにも及ぶこの一対の球体は、かの太陽王ルイ 14 世の求めに応じて、修道士・地理学者コロネリが作製したもの。フランス国立図書館の地図部が修復・復元し、2006 年からこの場所で公開されているそうです。

だいぶ遅れて現れた待ち人に、「すばらしい展示ですね！」と話しかけたところ、「いや…こんな入口からすぐのところで温湿度は安定しないし。第一あの高いところのホコリをどうやって払えばいいんだい？」

なるほど。資料保存部的には、悩ましい展示でもあるようでした。（小林）

リヨンの南約 70 ㎞のところにあるオートリーブという村の郵便配達夫シュバル（Joseph Ferdinand Cheval, 1836-1924）は、1879 年のある日の配達途中、つまずいて拾い上げた石の奇妙な造形に魅せられ、偏執狂とでも呼べそうな勢いで石集めを開始し、33 年という歳月をかけてこの「理想宮（Palais idéal）」を完成させます。その後 1969 年に重要建造物に指定されるまでの一連の顛末を、水木しげるさんが漫画化しています（『東西奇ッ怪紳士録』所収「フランスの妖怪城」）。

世に知られた観光名所でありながら、20km も離れた最寄駅からのバスは 1 日たったの 3～4 本、閑古鳥が鳴いているかと思いきや、自家用車でやってきたバカンスを楽しむフランス人たちで大盛況。日本語のパンフレットもあるし、京都の画廊で開催された展覧会の図録も販売していて驚かされました。（西尾）

Googleを超えて
レファレンス情報サービス分科会オープンセッション

8月18日に開かれたレファレンス情報サービス分科会のテーマは「グーグルは不十分　知識伝達のためのレファレンス情報サービス　議論の再構築」(Google is not enough: Reference and Information Services for the transfer of knowledge - reframing the discussion) でした。

当館からは筆者が「国立国会図書館における情報発信型のレファレンス・サービス」というテーマで、リサーチ・ナビで提供している「調べ方案内」について発表しました。そのほか、以下の5つの発表がなされ、その内容は多岐に渡るものでした。

①シンガポール国立図書館：同図書館で策定したレファレンスライブラリアンの専門能力開発プランについて

②フィンランド　ラハティ大学図書館：ラハティ市の大学図書館、研究図書館が協同で取り組む、高校生向けの情報リテラシー教育プロジェクトについて

③フランス　ポンピドーセンター公共情報図書館：2011年から開始したFacebookでのレファレンス・サービスについて

④ノルウェー国立図書館：レファレンスツールの作成が、activism= 積極的行動主義につながる可能性について（その一例として、ノルウェー国立図書館が作成している検閲についてのデータベースの紹介）

⑤カナダ　ビショップ大学図書館：これからのレファレンス・サービスに必要な概念

分科会には680名もの参加者があり、世界中の図書館員のインターネットと図書館の情報提供機能の関係についての関心の高さをうかがわせました。

筆者の発表に対し、フランス国立図書館の職員から、フランス国立図書館でも当館の調べ方案内と同様のガイドを作成しているが、まだ数が少なく、職員を刺激するためにも、当館の試みをもっと詳しく教えてほしいと声をかけられました。最終日にフランス国立図書館で用務があったため、別途時間をとって担当者にお会いし、リサーチ・ナビ全体について、調べ方案内作成のための職員のミーティングについてなど、分科会では発表することができなかった点について説明しました。このような形で、当館の試みが、海外の図書館の参考になることをうれしく思うとともに、英語で当館の取り組みを紹介していくことの必要性を感じました。(渡邉)

文化の夕べ：踊る世界の図書館員

IT 技術の進展に対応する情報技術分科会
情報技術分科会常任委員会

情報技術分科会は、IFLA5 部会のうちの第3部会である図書館サービス部会を構成する 11 の分科会等の一つであり、この分科会の常任委員会に、昨年に引き続き委員として参加しました。情報技術分科会はその名のとおり、情報技術の図書館情報サービスへの適用を、技術のベストプラクティスや標準化の普及を通じて促進し、前進させることを目的としています。この活動を進めるに当たり、進展が著しい重要な分野であって、かつ数年にわたる対応が必要と考えられる場合は、分科会とは別に「特別研究会」(SIG: Special Interest Group) を設立することによって、活動を強化し推進していきます。今年はこの特別研究会の編成に動きがあったため、本稿でご紹介します。

(1) RFID 特別研究会

Radio Frequency IDentification (RFID[1]) は、図書館に導入することで効果的な活用が期待され、2003 年 69 回ベルリン大会のオープンセッションを皮切りに特別研究会の活動を開始し、2010 年にかけて図書館システムとの連携や業務フロー、情報管理や電磁波に関する議論などを行ってきました。既に一定の成果を挙げたことから、またここ数年は主幹空席のまま現在に至ることもあり、この特別研究会を終了することとしました。

1 微小なICなどのRFチップを活用して無線で情報をやりとりする技術。バーコードに代わる識別・管理技術として研究が進められてきた。

(2) セマンティックウェブ特別研究会

セマンティックウェブと図書館との関連するトピックを広く議論し、様々な関係者と協同することを目的として 2011 年に活動を開始しました。ここ数年は関連のある Linked Data についてサテライトミーティングを開催するなどの活動を行ってきました。しかし、Linked Data については知名度が向上し、実際の活用も進んでいることなどから、次回大会までに他の分科会等との調整も含めて、新たな組織編成と活動の検討を行うことになりました。

(3) ビッグデータへの取り組み

ビッグデータは 2013 年 IFLA トレンドレポートで取り上げられ、少なくとも今後 5 年を超える長期間において、そのメリット、プライバシー、権利関係などの多様な局面で、IFLA がビッグデータに注目すると考えられることから、本年、情報技術分科会は特別研究会の設立を提案しました。その結果、ビッグデータ特別研究会は第 3 部会の部会長から強い支持を受け、特別研究会設立の承認が得られる前提で前向きに活動を進めるように指示されています。早ければ 12 月に IFLA 理事会によって、ビッグデータ特別研究会の設立が承認される模様です。

このように情報技術分科会常任委員会は、情報技術の進展状況を注視しながら、時には特別研究会を設立してこの進展に対応しています。

(竹鼻)

図書館って、もう静かに本を読んでるだけの場所じゃない!?
児童・ヤングアダルト図書館分科会

(1) 常任委員会

常任委員会では、昨年に引き続き「児童図書館サービスのためのガイドライン」修正案、国を越えた「姉妹図書館」事業の財政状況（IFLA本部からの資金援助延長措置が終了）などが議論され、各国が代表的な児童書を10冊ずつ提供して展示会を行う「絵本で世界を知ろうプロジェクト（後述）」はこの秋で新たな本の追加を締め切り、展示会図録[1]の最終版を刊行することが決まりました。

また「絵本で世界を知ろうプロジェクト」に続く「青少年向け図書で世界を知ろうプロジェクト」の始動が告げられたほか、ソーシャルメディアが発達する中で子どもたちのプライバシーと安全を守るためのガイドライン「図書館におけるソーシャルメディアと児童・青少年」[2]が承認のうえ会期中に公表されました。

(2) 関連講演会

最終日の8月21日に行われた「世界を広げよう：児童・ヤングアダルト図書館のための参加型IFLAプログラム」講演会で、「絵本で世界を知ろうプロジェクト」巡回展の概要報告として、フランスと共に寄託国となっている日本（国際子ども図書館）での取り組みについてプレゼンテーションを行いました。貸出実績（昨年度は韓国の図書館2館等、今年度は国内の震災・津波被災地の図書館3館等）と、国内巡回展における来場者の理解を深めるための展示の工夫（図録から翻訳した解説シート、出品国の紹介パネル等）について紹介し、最後にアジア・オセアニア地域の図書館からの貸出申込みを待っていることをアピールしました。

この分科会での一連の講演会の中心的トピックが「電子的コンテンツづくり」と「トランスメディア」です。どちらも、本に書かれた内容や新たなコンテンツを映像や電子メディアなど紙以外のメディアで表現することで、図書館を舞台に本のストーリーを子どもたちが演じたものをYouTubeに投稿するといった事例報告もいくつかなされました。また館内に3Dプリンタを設置して子どもたちに自由に使わせるのもトレンドのようです。お堅いことは抜きにして、まずはお絵描き感覚で図書館に来て楽しんでもらうのが先決、と言ったところでしょうか。（西尾）

1 http://www.ifla.org/files/assets/hq/publications/professional-report/135.pdf
2 http://www.ifla.org/files/assets/libraries-for-children-and-ya/publications/social_media.pdf

（秋山　勉　収集書誌部主任司書）
（廣瀬　淳子　調査及び立法考査局政治議会調査室主幹）
（大柴　忠彦　関西館図書館協力課長）
（小林　直子　収集書誌部主任司書）
（渡邉　由利子　利用者サービス部サービス企画課）
（竹鼻　和夫　電子情報部電子情報サービス課）
（西尾　初紀　国際子ども図書館児童サービス課長）

海外と日本をつなぐ！　国立国会図書館の国際協力活動

"National Diet Library, how can I help you? ... No, it's not that kind of diet! The Diet we serve is the legislative branch of the Japanese government..."

17時過ぎの電話には要注意。「外国からのお電話です。Go ahead, please!」という代表電話からの取次ぎの声とともに、ビジネス英会話の実践開始です。

協力係ではこのような海外からのお問合せに対応するほか、英語による館内ガイドツアー、海外の国立図書館との業務交流の企画・運営など、国立国会図書館（NDL）の様々な国際協力活動をバックアップしています。

本誌で特集している国際図書館連盟（IFLA）との連携もNDLの大切な国際協力活動のひとつです。当係ではIFLA年次大会に参加するNDL代表団の参加登録や発表原稿の英文校正のほか、2年おきに実施される役員・分科会常任委員の選出や会費支払いなどのIFLA事務局との連絡を一手に引き受けています。なお、NDL職員の発表原稿は、当係が編集する英文ニュースレター *National Diet Library Newsletter*（http://ndl.go.jp/en/publication/ndl_newsletter/index.html）に掲載していますのであわせてご覧ください。

また、アジア・オセアニア地域国立図書館長会議（CDNLAO）のウェブサイトの管理とその

ニュースレター *CDNLAO Newsletter*（http://www.ndl.go.jp/en/cdnlao/newsletter/）の編集も担当しています。アジア・オセアニア地域の国立図書館の発展と連携強化に資するため、各国立図書館の通信員と協力し、日々、情報収集に努め、地域内の国立図書館に係る最新の情報を提供しています。

講演会などを開催するために海外の図書館や文化機関から専門家を招く際にも、当係が窓口となることが多いです。海外の機関とのやりとりを通じて、自席にいながら、言葉だけではなく意思決定や仕事の進め方の違いといった「異文化」に接する機会があることが、当係の仕事の苦労する点であり、醍醐味でもあります。好奇心と柔軟性を持って、粘り強く様々な差異を乗り越え海外と日本をつなぐ意欲のある方、一緒にお仕事しませんか？

（支部図書館・協力課協力係
CDNLAOニュースレター編集担当）

子どもの探究活動と図書館の可能性

～「調べものの部屋」開室に向けた調査プロジェクト講演会から～

国立国会図書館国際子ども図書館は、平成27年度に新館竣工に伴うリニューアルを行い、中高生向けの資料室「調べものの部屋」を新たに開室します。「調べものの部屋」の開室に向けて、平成24年度から平成25年度にかけて「中高生向け調べものの部屋の準備調査プロジェクト」を実施しました。平成26年3月には、その成果を報告書『国際子ども図書館調査研究シリーズ　No.3』[1]として刊行し、さらに7月6日に講演会「子どもの探究活動と図書館の可能性」を開催しました。

1．プロジェクトの概要

中高生向け「調べものの部屋」では、学校図書館のモデルケースとなるサービスの提供を目指しています。プロジェクトでは、中村百合子氏（立教大学准教授）を主査に迎え、学校図書館のコレクション（図書以外の多様なメディアも含む、図書館が所蔵する資料全体）形成の現状と、コレクション形成の効果的な方法を探りました。

具体的には、学校図書館のコレクション形成に関する文献調査、学校図書館が充実した読書推進活動をしていることで知られ、コレクション形成が意識的に行われていると考えられた中学校及び中高一貫校10校を対象とした聞き取り調査と所蔵目録のデータ分析調査を行いました。更に、調査対象校の学校図書館担当者に対して、グループインタビューを行いました。

学校図書館のコレクション形成に影響を与える志向性

【志向性ⅰ】利用者ニーズの重視
【志向性ⅱ】読書材（楽しみのための読書で用いる資料）提供の重視
【志向性ⅲ】情報リテラシー育成への貢献
【志向性ⅳ】大人の読書への橋渡しの意識
【志向性ⅴ】大学教育への知的継続性

図1　学校図書館のコレクション形成に影響を与える志向性

調査対象10校に共通する手法を探ることで、学校図書館におけるコレクション形成の効果的な方法を解明しようと実施した調査でしたが、その結果、コレクション形成の業務においても、出来上がったコレクション自体においても、学校間の違いが大きいことが明らかとなりました。考察を進める中で、各校のコレクション形成に影響を与えているいくつかの要因を“志向性”としてまとめました（図1）。志向性とは、コレクション形成や資料選択の背景にある学校図書館担当者の意識であり、複数の志向性が学校ごとに独自の比率で組み合わされて、それぞれのコレクションに影響を及ぼしていると考察しました。

また、今回調査対象とした学校図書館では、生徒の読書推進に留まらず、いわゆる「探究的な学習」[2]（探究活動）に積極的に関与しているという共通項が見いだせました。各校では、探究活動で取り上げられるテーマに関連した資料を多く収集し、それが各校のコレクションの個性につながっている可能性も高いと考えられます。

報告書では、調査対象校で利用している選書情報源や各担当者がコレクション形成で留

意している点、所蔵データ分析調査の結果などをまとめています。報告書の本文を国際子ども図書館ホームページで公開しています[1]。

2．講演会の対談から

7月6日に開催した講演会では、プロジェクト主査の中村百合子氏を聞き手として、ホリスティック教育[3]や探究的な学習について多くの著作を発表されている成田喜一郎氏（東京学芸大学教職大学院副院長）と対話型の講演を行いました。教育学の理論から具体的な学校現場のエピソードまで話題は多岐にわたりましたが、ここではポイントとなった部分に絞ってご紹介します。

（1）学校図書館のコレクション形成

中学校教員の経験をもつ成田氏は、今回のプロジェクトについて、「中高生向け」という点に着目しているとし、教員時代の実務・実践経験から、小学生向けの資料が充実している一方で中学生向けの資料が市場に少ないと考えていたと述べました。プロジェクトの中で実施した学校図書館担当者のグループインタビューでも、中学生向け資料を選ぶ難しさや出版点数の少なさが話題に上っています[4]。さらに、プロジェクトで整理した学校図書館のコレクション形成に影響を与える5つの志向性（図1）の中で成田氏は、「iv 大人の読書への橋渡しの意識」「v 大学教育への知的継続性」を取りあげ、中高生がこれから市民性（シティズンシップ）を獲得していく段階にあるという認識が、学校図書館の中に志向性として根付いていると指摘しました。

（2）探究活動は今後の学校図書館のキーワード

プロジェクトの結果、調査した学校図書館では、探究活動や調べものに積極的に関与しているという共通項が見いだせました。探究活動は、問題解決的な活動が発展的に繰り返されていく一連の学習活動であるとされています。中村氏は、アメリカにおける学校図書館研究においても2000年頃から「inquiry（探究）」という単語が非常に注目されていると指摘し、探究活動はこれからの学校図書館のコレクション形成を考えるキーワードであると述べました。

成田 喜一郎 氏
東京学芸大学
教職大学院副院長

報告書では、“正解が示されるとは限らないタイプの調べもの”と、“ひとつの正解を探す調べもの”という2種類の調べものがあるとすれば、前者を探究活動として議論しています。

「探究活動とは何か」を考えるヒントとして、成田氏は、「理解の6側面」（図2）という教育学の理論を紹介しました。「理解の6側面」では、説明することで理解が深まる、共感することでも理解が深まる等、色々なアプローチで理解が深められることを表現しています。成田氏は、探究活動に取り組むには、知識の理解→応用→分析といった直線的なステップで考えるのではなく、「理解の6側面」のように色々な窓が同時に展開するイメージで考えるべきだと指摘しました。

中村 百合子 氏
立教大学文学部准教授

図2　理解の6側面
McTighe , J & Wiggins G.（2004）. Understanding by Design: Professional Development Workbook. Association for Supervision and Curriculum Development.
講演者成田喜一郎氏のスライドp.11より

（3）探究の6側面

探究活動を具体的に実施するにあたって成田氏は「探究の6局面」（図3）を紹介し、このようなサイクルを意識した指導が必要であると述べました。①問題状況を探索する、②解決すべき問いを立てる、③問いの答えを仮説として持つ、④問いの解決方法を計画する、⑤問いの解決方法を実行する、⑥答えを出し振り返る、というサイクルです。特に②では、子どもたちに内在する課題を発見できるか、問いを掘り起こせるかどうかが鍵となると指摘しました。

図3　探究の6局面
講演者成田喜一郎氏のスライドp.14より
出典：福井県立藤島高等学校*
http://www.fujishima-h.ed.jp/data/Kouki%20kenkyukiso%20text%20bunkei.pdf
*平成16年度および平成21年度に文部科学省よりスーパーサイエンスハイスクール指定を受け、大学や研究機関との連携や校外研修などの教育活動を推進している高等学校。スーパーサイエンスハイスクールについては独立行政法人日本科学技術振興機構HP（https://ssh.jst.go.jp/ssh/public/about.html）を参照。

また、学習の振り返りについても話題に上りました。振り返りは学習活動の最後に行われることが多いですが、成田氏は途中のステップにおいても重要であると述べました。論理的な省察だけでなく、観想的な振り返り、鳥の目（大局を見る）、虫の目（詳細を見る）、魚の目（流れを捉える）等さまざまな視点で自分の研究を見直しながら進めることが大切であるとの指摘です。さらに成田氏は、探究活動全体が教育課程の中にどのように位置づけられるかも大切であると述べました。

（4）“つながりへの気づき”と図書館の役割

探究活動では教科を越えたテーマのつながりも見られます。成田氏は、探究とは“つながりへの気づき”とも言えると述べ、“つながり”はホリスティック教育[3]でも重要なキーワードであると指摘しました。学校では、子どもの学びが教科や時間割で区切られていますが、子どもの内面では時間も空間も情報もつながっていると指摘し、多様な知の分野のつながり、子ども自身と地域コミュニティや世界とのつながりなど、色々なつながりに目を向けられるかどうかが重要であるとしました。探究を“つながりへの気づき”と考えると、分野にとらわれず全ての情報がある空間が、まさに図書館であると成田氏は述べ、色々な角度から資料を紹介できることが学校図書館の重要な役割であるとしました。

（5）研究テーマの広がり

プロジェクトの中で実施した学校図書館担当者のグループインタビューでは、生徒がよく取り上げる研究テーマについても話題に上りました。各校の学校図書館担当者の経験から頻出実例を上げ、報告書にまとめています[5]。頻出するテーマには、「環境問題」「高齢化社会」といった問題と同時に、「アイドル」「チョコレート」のように生徒に身近な話題から選ばれているものもありました。成田氏は、「チョコレート」というテーマでも、例えば「ガーナの子どもたちとのつながり」といった社会的な課題へとつなぐことができると指摘しました。また研究テーマを決めた生徒に対して、図書館で教員や学校図書館担当者が関連資料を提示するという働きかけが非常に大切であると述べました。

（6）持続可能な開発のための教育

成田氏が現在精力的に取り組んでいるのが、ユネスコの主導で展開されている「持続可能な開発のための教育[6]（ESD：Education for Sustainable Development）」です。ESDは環境問題、人口問題、エネルギー問題など、

現代社会が抱える課題を自らの問題としてとらえ、持続可能な社会づくりの担い手を育むことを目指す学習や活動です。これらの現代社会が抱える課題の多くは、さまざまな分野にまたがった問い、正解のない問いを含んでいます。成田氏は、そういった課題に向かって、大人とともに子どもたちがチャレンジする重要性を指摘しました。また、持続可能な社会に必要なことは大人が子どもをリスペクトすることであり、探求活動を通じて子どもが大きく変容し、子どもたちが尊敬される社会となることが望ましいと述べました。

（7）終わりに

講演会終了後は、参加していた中学校や高等学校の図書館担当者や研究者、教育委員会関係者等からの活発な質疑応答があり、中村氏、成田氏と参加者との対話が行われました。国際子ども図書館ホームページには、講演会当日の配布資料を掲載しています[7]。

中村氏は講演会で、実際の学校現場ではない国際子ども図書館が、学校図書館のモデルケースとなるサービスに取り組むことに、ある種の限界はあるとしながらも、日常的に機能している学校図書館ばかりではないという現実に対しては、モデルの提示は意味があると語りました。「調べものの部屋」では、中高生の調べものに役立つサービスだけでなく、学校図書館関係者への情報提供もサービスの一つと位置づけ、開室の準備を進めていきたいと考えています。

（国際子ども図書館児童サービス課）

1　国立国会図書館国際子ども図書館編・刊『国際子ども図書館調査研究シリーズ No.3「学校図書館におけるコレクション形成：国際子ども図書館の中高生向け「調べものの部屋」開設に向けて」』2014　＜請求記号 UL615-L3＞
http://www.kodomo.go.jp/info/series/index.html#anchor3

2　探究的な学習については、現行学習指導要領の「総合的な学習の時間」の「目標」に以下のように記述されている。
横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。
（文部科学省 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/index.htm）

3　「ホリスティック教育とは、〈かかわり〉に焦点を当てた教育である。すなわち、論理的思考と直観との〈かかわり〉、心と身体との〈かかわり〉、知のさまざまな分野の〈かかわり〉、個人とコミュニティとの〈かかわり〉、そして自我と〈自己〉との〈かかわり〉など。ホリスティック教育においては、学習者はこれらの〈かかわり〉を深く追求し、この〈かかわり〉に目覚めるとともに、その〈かかわり〉をより適切なものに変容していくために必要な力を得る。」J.P. ミラー『ホリスティック教育　いのちのつながりを求めて』春秋社 1994, p.8　＜請求記号 FA3-E23＞

4　前掲1 pp.78-79, 89-90参照

5　前掲1 pp.98-100参照

6　環境、貧困、人権、平和、開発などの現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組むことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動。
（文部科学省 http://www.mext.go.jp/unesco/004/1339970.htm）

7　講演会「子どもの探究活動と図書館の可能性」
http://www.kodomo.go.jp/promote/school/room-lecture.html

筆者は、国際子ども図書館に在籍していた2014年2月から3月にかけて、ヨーロッパの4か国（ノルウェー、スウェーデン、ドイツ、フランス）を訪問し、児童書専門機関や、先進的な児童サービスを展開する図書館の動向を調査する機会を得た。本稿では、2月15日から21日まで約1週間滞在したスウェーデンの首都ストックホルムの街の様子や、現地で訪問したさまざまな図書館を紹介したい。

世界図書館紀行

ストックホルム

平澤 大輔

水の都ストックホルム

スウェーデン最大の都市であり、北欧でも最大の人口約88万人を誇るストックホルムは、メーラレン湖がバルト海につながる場所に位置する水上都市である。中世の街並みが残る旧市街、フェリーや観光船、さらには市民のボートやヨットが水上を行き交う様子から、「北欧のヴェネツィア」とも呼ばれ、世界で最も美しい都市の一つとしてしばしば言及される。

ストックホルムの歴史は、13世紀にまでさかのぼる。フォルクンガ王朝の祖ビルイェル・ヤール（Birger Jarl, ?-1266）は、ドイツのハンザ商人との通商を円滑に行うため、メーラレン湖とバルト海を結ぶ唯一の水路であったストックホルム海峡の小島に砦の建設を指示した。この時、外部からの侵入を防ぐため海峡に設置した丸太の柵が、ストックホルム（ストック＝丸太、ホルム＝小島）の語源になったと伝えられている。その後、17世紀に都市計画が実施されてからは、市民と商人の港町にとどまらず、貴族や兵士、職工、労働者の町として、ストックホルム城がそびえるスタッツホルメン島を中心に、北（ノルマルム地区）へ南（セーデルマルム地区）へと広がっていった。現在は、産学官が連携してクリーン都市開発を積極的に行うなど、環境共生都市として耳目を集め、夏の観光シーズンには世界中から多くの人が美しい街並みと豊かな自然を満喫しに訪れる一方で、毎年約2万人もの移民が流入する多文化都市としての側面も併せ持つ。

次に、街の様子に少し目を向けてみよう。大小合わせて14の島からなるストックホルムの中心部は、いくつかのエリアに分かれている。繁華街は中央駅の東側に広がっており、ヒョートリエット広場（写真1）からセルゲル広場を通って、議事堂（写真2）へと伸びる歩行者専用道路のドロットニングガータン通り周辺は、ストックホルムで最もにぎわうショッピングエリアとなっている。議事堂のあるヘリエアンツホルメン島をさらに南に行くと、石畳の通りに中世の建物が立ち並ぶガムラ・スタン（旧市街 写真3）が広がり、誰もいない細い路地に一歩入れば、まるで13世紀にタイムスリップしたかのような感覚が味わえる。さらに南、ガムラ・スタンとスルッセン地区で結ばれたセーデルマルム島は高台になっており、ストックホルム市街を一望することができる。かつて労働者が多く住む街だったセーデルマルム地区は、芸術家などが集まるようになり、今では若者に人気のスポットとなっている。このほか、王立図書館があるフムレ公園やベルツェリー公園、王立公園など、多くの公園が広がるエステルマルム地区や、17世紀に海軍の基地が設置されていたことから「海軍の島」とも呼ばれるシェップスホルメン島、世界最古の広大な野外博物館スカンセンがあるユールゴーデン島など、見どころを挙げればきりがない。

1

2

3

4

ストックホルム市立図書館

ストックホルム市内にある40の市立図書館の中央図書館としての機能を担うストックホルム市立図書館（以下、便宜的に「中央図書館」と呼ぶ。）は、スウェーデンの現代建築の父として知られているグンナー・アスプルンド（Erik Gunnar Asplund, 1885-1940）の設計により、1928年に建設された（写真4）。中央のロトンダ（円形の建物）を東西南北の四つの建物が囲む形になっており、ロトンダ部分のぐるりと一面の壁に備え付けられた書架には、古典文学や北欧諸国のフィクション作品約4万冊が排架され（上写真）、その外側の建物には、五つの主題別の専門室がある。来館者数は、一日あたり平均約3,000人に上る。

メインエントランスを入ってすぐ左側には子ども向けの資料室があり、児童・青少年向けの資料が並んでいる。その奥に進むと、おはなし会などの子ども向けイベントを行うための部屋があり、壁に描かれたニルス・ダーデル（Nils Elias Kristofer von Dardel, 1888-1943）のフレスコ画“John Blund”が幻想的なムードを作り上げている（写真5）。このスペースでは、わらべうたや絵本の読み聞かせなどのイベントが、金曜日を除くほぼ毎日行われており、英語やロシア語でのおはなし会や音楽会なども定期的に開催されている。そのほか、10歳から12歳までの子どもを対象とした、好きな本や作家について一緒に語り合う読書クラブや、12歳から15歳までが参加できる、詩や物語などの創作コンテストも開かれている。

5

現在、中央図書館では約55万冊の資料を所蔵しており、そのうちの約20万冊が開架されている。書庫は1階と地下部分にあり、資料に貼付されたICタグによって、自動で仕分けを行う設備が整っているため、出納作業はごく少数の職員で行われている。なお、雑誌が排架されている地下の書庫で、土壌から放出されている高濃度の放射性物質ラドンが検出されたため、筆者が同館を訪問した時点では立入りが禁止され、一部の閉架資料の閲覧は停止されている状態であった。書庫内におけるラドンの濃度を下げるべく、24時間換気を行っているものの、十分な低下には至らず、再開の目途は立っていないということであった。

国際図書館

2000年に、中央図書館のすぐ隣に新たに設立された国際図書館は、多言語の資料を専門的に取り扱っており、組織的には中央図書館の分館に位置付けられる（写真6）。同館は、その他の市立図書館とは異なり、国、県、そして市をサービスの対象としているため、予算の約25％を国が、同じく約25％をストックホルム県が、そして残りをストックホルム市が担っている。これはつまり、同館が収集している多言語の資料に関して、全国の図書館に貸し出す図書貸借センターの役割と、その他の市立図書館と同様に、市民に貸し出す公共図書館の役割を同時に担っていることを意味している。

国際図書館では、所蔵資料の閲覧や貸出しのほか、館内に設置された端末を用いて、世界各国の新聞のデータベースや、インターネットの利用が可能となっており（写真7）、カフェも併設されている。

現在、国際図書館では、27の言語に通じた20か国出身の職員30名が働いている。100を超える言語の資料約20万点を所蔵しており、収集する資料は年間約14,000点に上る（写真8）。資料の収集は、公共図書館という性格上、一般向けの資料が中心であり、利用者の要望に応えることも積極的に行っている。所蔵資料の中では、スペイン語、アラビア語、ペルシャ語、ロシア語などの割合が多い。日本語資料は、平成26年9月29日現在、4,617点を所蔵しており、そのうち児童・青少年向けの資料は1,882点である。未所蔵の言語の資料についても、リクエストがあれば収集を検討する一方で、これまで収集していた言語の資料が利用されていないと判断された場合は、収集を停止する可能性もあるという。スウェーデンでは、移民に対して、スウェーデン語の習得を奨励すると同時に、母国語の習得あるいは維持も積極的に推進しているため、国際図書館の資料はその点でも、重要な役割を果たしている。

スウェーデンでは、2014年1月に図書館法が改正され、公共図書館はスウェーデン語以外を母語とする人向けの資料を提供しなければならないことがより明確に規定され、国、県、市のいずれでも、公共図書館が地元の利用者のニーズに合ったサービスの充実に努めることが強調された。そこで、国際図書館では、他の図書館に対して、資料の貸出しといった直接的な支援から、多言語資料の販売元の紹介や目録の充実、多言語資料を扱う職員への研修といった、各図書館自体によるコレクション構築等の間接的な支援に、より力を入れている。その手段の一部として、今年10月に公開された新たなウェブサイトでは、目録検索を含む全てのコンテンツについて、8言語で提供するなど、多言語サービスのさらなる充実が図られている。また、王立図書館が運営する総合目録LIBRISへも、より多くの目録を登録しているところである。

6

7

8

9

10

11

文化会館

セルゲル広場に隣接する文化会館には、主にフィクションや芸術関係の本を所蔵する小規模な図書室をはじめ、現在、六つの図書室がある（写真9-11）。そのうち、子ども専門の図書室であるTio Tretton とRum för Barnの2施設を訪問した。

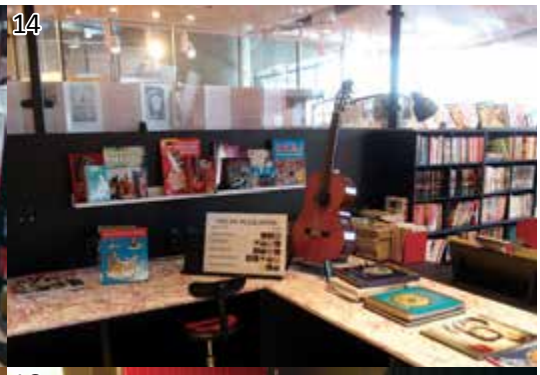
●Tio Tretton

Tio Trettonは、10歳（Tio）から13歳（Tretton）までの子どもを対象としており、それ以外の年齢の利用者は、入室が固く禁じられている（写真12）。ちょうど親からの自立が始まる時期であり、プライベートな環境を求める傾向にある10歳から13歳の子どもを対象に、「同世代だけの空間」を提供することを目的として、2011年に開室した。子どもにとって、図書館は、何も理由がなくても訪れることができる数少ない場所の一つである。Tio Trettonの職員によると、コミュニティの一部であるということを感じることができ、同時に、コミュニティの一部となる必要がない空間が子どもにとって重要であるとの考えから、10歳から13歳専用の図書室が発案されたという。背景には、まさにこの年代から、本を読まなくなる子どもの増加が顕著になっており、本から離れていく子どもたちに、本の素晴らしさや楽しみを伝える場を提供し、本離れを防ぐねらいがある。

Tio Trettonでは、午前中は事前予約制でクラス単位での訪問を受け入れ、15時から19時までは一般の子どもたちに開放している。職員以外の大人の入室は禁止されているため、午前中のクラス単位での利用の際も、引率の教員は外で待機する。

室内には、青少年向けの本をはじめ、PCやタブレット端末、楽器などが用意された閲覧室、調理道具一式がそろったキッチンや、映像作品の制作に必要な機材を備えたラボも設けられている（写真13-16）。曜日ごとに、楽器の演奏や、お菓子づくりなどのプログラムが職員によって企画されるが、それ以外の時間は、子どもたちの自主性にゆだねられており、ソファに寝転がって一人で本を読む子どももいれば、キッチンで飲み物を片手におしゃべりに興じる子どもたちもいるなど、楽しみ方はさまざまである。

13


14

「大人は立ち入り禁止！」と書かれている

12

15

16

●Rum för Barn

文化会館の中にあるもう一つの子ども向け図書室が、9歳以下の子どもを対象としたRum för Barn（子どものへや 写真17）である。この図書室は、小さな子どもを対象としていることから、Tio Trettonとは異なり、保護者も入室できる。入り口には職員が1名常駐しており、入室前に利用方法について簡単な説明を受ける仕組みになっている。

室内は大きく四つのエリアに分かれている。入ってすぐ左側には、0歳から2歳ごろまでの子どものためのスペースがあり、この部分のみ、特に小さな子どもの安全に配慮して、柵で囲われている。壁には乳幼児向けの本が並び、いくつか遊具も配置されている（写真18）。

少し先に進むと、2歳から6歳頃までの子どもを対象とした、木製の書架が並ぶスペースが広がる。テーマ別に本が並ぶ書架には、はしごが備え付けられ、手を伸ばしても届かない高いところにある本も、自分自身で取ることができるようになっている（写真19）。また、木製の書架には、隠し部屋のようになっている部分があり、子どもが一人きりで本を読むことができるスペースとして利用されている（写真20）。そのほか、あえて書架に階段やスロープを設けるなど、子どもの遊び心を刺激するようなつくりになっている。

さらに奥は、6歳から9歳頃までの子どもを対象としたスペースとなっている。ここでも、「動物」や「ファンタジー」といったテーマ別に本が並び、自分の興味に合った本が簡単に見つけられるようになっている。また、「フェアリーテイルの部屋」と呼ばれる、おはなし会などを行うスペースが設けられており、部屋の内部には夜空に星が輝いている様子が描かれ、子どもたちを幻想的な世界へといざなうイベントが定期的に開催されている。

室内の一番奥には、アートスタジオが併設されており、来室した子どもが、絵を描いたり、工作したりできる（写真21）。ここで製作した作品は、家に持ち帰ることができ、製作途中の場合は、1週間を上限として、スタジオ内で保管してもらうことも可能である。

Rum för Barnは開室以来、大変な好評を博している。週末には行列ができ、入室するまでに2時間待たなければならないこともあるという。これは、あまりにも子どもが多くなりすぎると、職員の目が届かなくなってしまうことから、利用者が一定数を上回ると、入室制限を行うためである。入り口のすぐそばには、子どもたちが遊ぶことができるスペースや、本の展示などを行うスペースが設けられているなど、待ち時間に退屈しないよう配慮されているほか、文化会館前に広がるセルゲル広場から見える位置に、混雑状況を知らせる信号を設置するなどの工夫がなされている（写真22）。

23

PUNKTmedis

セーデルマルム地区の中心部に位置するメードボリャプラツェン広場の南側に建つメードボリャ会館（写真23）には、公民館や図書館、プールなどの公共施設が入っている。その中の一つが、おもに13歳から19歳までの若者を対象とする図書館、PUNKTmedisである。この図書館では、約1万点の資料を所蔵しており、資料の利用率は、市内の他の図書館と比べて高く、特にファンタジーやホラー、SF、そして英語の本の人気が高いという。

PUNKTmedisでは、ファンタジー作品を好む人たちが集まる専用の部屋を設けたり、ボランティアが宿題を支援するプログラムを定期的に行ったり（写真24）、様々なプログラムを提供しているが、なかには、図書館にはあまりなじみがないような活動も行われている。たとえば、天井に飾られた巨大なニットの蛇は、毎週月曜の17時から21時まで開催されている「編み物カフェ」に参加する若者たちが作ったもので、蛇の身体は現在も編み足されて、少しずつ伸びているとのことである（写真25）。

このほか、ストックホルム在住の、芸術や音楽など文化に関わる取り組みの実施を考えている10歳から25歳までの若者を対象に、1事業当たり最高で1万クローナの資金援助を行うプロジェクトを実施するなど、従来の図書館の枠組みにとらわれず、若者の文化の拠点として、幅広い活動が展開されている。

2013年から2014年にかけて、ヨーロッパは近年まれにみる暖冬となり、ストックホルム滞在中も、雪に見舞われたのはたったの一度きりで、例年は雪に覆われる公園の芝生も顔をのぞかせていた。気温の暖かさもさることながら、日本から来た見ず知らずの図書館員に対して、ストックホルムの歴史や観光スポットから、自身の業務の内容、さらには現地の子どもの読書事情に至るまで、忙しい中、懇切丁寧に説明してくださった方々の温かさが身に染みる訪問となった。ここに紹介できなかった機関の方々も含め、この場を借りて、厚く御礼申し上げる。

（ひらさわ　だいすけ　総務部人事課）

＜参考文献＞
●スウェーデン文化交流協会［著］『スウェーデンとスウェーデン人』（［スウェーデン文化交流協会］, c1999）＜請求記号　GG641-G13＞
●村井誠人編著『スウェーデンを知るための60章』（明石書店　2009）＜請求記号　GG641-J5＞

24

25

本屋にない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、
日本国内の出版物を広く収集しています。
このコーナーでは、主として取次店を通さない
国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

図書館とともに
キハラ100年の歩み

キハラ100周年記念誌編集委員会 企画・編集　キハラ 刊
2014.1　289p　31cm　　＜請求記号　DH22-L285＞

キハラ株式会社のルーツは、大正3（1914）年に鬼原乾輔と兄・知教が神田神保町に創立した鬼原正三堂に遡る。当初は製本業を営んでおり、次第にカードなどの作成を手掛けるようになったという。第二次世界大戦後、「鬼原」から「木原」に名を変え、株式会社に改組した木原正三堂は、昭和25(1950)年の広告に「図書館用品なら何でも揃う店」との理念を掲げ、図書館用品を扱う企業として発展を遂げていった。昭和61（1986）年、株式会社木原正三堂よりすべての営業権の譲渡を受けて、新たにキハラ株式会社が設立され、現在に至っている。

本書は、こうして平成26年に創業100周年を迎えたキハラの社史であるが、同時に、通常の社史の枠組みを凌駕する高水準の図書館史の本である。本書は全部で4部から構成されている。第1部が通史、第2部が座談会・インタビュー・寄稿、第3部は写真集、第4部が資料集となっており、経営・組織・財務のほか年表などの資料を載せている。「編集後記」に書かれているように、「図書館用品・家具総合メーカーから見た『図書館史』及び『図書館用品史』をめざす」という本書の編集方針は、巻末の年表に至るまで全編に貫かれており、一読すれば『図書館とともに』という書名に込められた熱意に圧倒されるに違いない。主な特徴を挙げれば、本文の記述が明治5（1872）年の書籍館設立から始まり、図書館用品を扱う商店の先駆者として、丸善、伊藤伊商店、間宮商店など他社の活動にも触れていること、それぞれの時代の図書館サービスとの関わりの中で会社の活動を位置づけようとしていること、図書館界の先達たちの回顧談が貴重な時代の証言となっていることなどが注目される。様々な工夫が本書の記述を実りあるものにしているといえよう。

図版が豊富なことも本書の大きな特徴である。たとえば、1960年代以降の図書館への納入事例として掲載されている写真群は、文書等ではうかがい知ることのできない閲覧室の風景の変遷を調べるための貴重な材料となっている。特筆すべきは、同社が90周年を記念して、日本図書館協会の協力のもとに平成16年から進めてきた、「『歴史的図書館用品』の調査・収集・保存事業」の成果が、ふんだんに盛り込まれていることであろう。平成25年10月現在で約1,250点を集めたとされており、その成果の一端は、平成26年11月開催の第16回図書館総合展で披露され、多くの来場者の注目を集めていた。まだ整理は完了していないとのことだが、本書で紹介されたカードや製本用品、巡回文庫の行李などのカラー写真の情報によって、従来の図書館史では得られなかった発見が促され、研究が深化していくことが期待される。

（利用者サービス部人文課　長尾　宗典）

※在庫僅少。キハラ株式会社 営業部03（3292）3301（代表）に電話でお問い合わせください。

新副館長就任

池本幸雄国立国会図書館副館長が平成26年12月15日付けで退任し、同日付けで網野光明が副館長に任命された。

おもな人事

平成26年12月15日付け

＜辞職＞

副館長　池本　幸雄

＜異動＞
※（　）内は前職

副館長、調査及び立法考査局長事務取扱
（専門調査員　調査及び立法考査局長）　網野　光明

電子展示会「近代日本とフランス―憧れ、出会い、交流」

12月3日（水）から日本とフランスの交流の歴史をテーマとした電子展示会「近代日本とフランス―憧れ、出会い、交流」の提供を始めました。

国立国会図書館では、平成25年3月にフランス国立図書館（Bibliothèque nationale de France）と図書館活動の各分野における包括的な協力協定を締結し、順次取り組みを進めています。その一環として、両国立図書館のコレクションの中から、多年にわたる両国交流の歴史を反映する資料を精選し、共同電子展示会を実施することとなりました。

本年6月に「富岡製糸場と絹産業遺産群」がユネスコ世界文化遺産に登録されたことは記憶に新しいところですが、その建設・運用にはヨーロッパ最大の絹織物工業地帯リヨンを擁するフランスの技術が導入されました。このように、日本の近代化にあたりフランスから受けた影響には多大なものがあります。また、芸術からライフスタイルに至るまで、フランス文化は日本人の憧れの的であり続けてきました。電子展示会「近代日本とフランス―憧れ、出会い、交流」は、安政5（1858）年の日仏修好通商条約締結に始まる両国の交流を、政治、産業、文学、芸術、生活スタイル、サブカルチャー等の各分野にわたり、約200点の資料で紹介しています。また、年表や人物索引を設けて、日仏交流史を総覧できるようにしています。近く公開される、フランス国立図書館の電子展示会「フランスと日本　ひとつの出会い 1850-1914」（“France-Japon, une rencontre, 1850-1914”）と合わせてお楽しみください。

○ URL　http://www.ndl.go.jp/france/index.html

国際シンポジウム「デジタル文化資源の情報基盤を目指して：Europeanaと国立国会図書館サーチ」

昨今、図書館・文書館・博物館・美術館等のデジタルアーカイブに蓄積された文化資源のオープンデータ化の流れが加速しています。このシンポジウムでは、ヨーロッパにあるデジタルアーカイブの文化資源を統合的に検索できる「Europeana」の事業モデルを広く国内に紹介するため、Europeana執行委員のニック・プール氏を招き、講演していただきます。また、日本国内における同様の事例として、国立国会図書館サーチを取り上げ、連携機関の担当者から現状と課題についてお話しいただき、デジタル文化資源の未来について考えます。デジタルアーカイブ関係者はもとより、ご関心をお持ちの皆様のご参加をお待ちしています。

○日　　時　　平成27年1月22日（木）13:00～17:00　（12:30開場）
○会　　場　　国立国会図書館 東京本館 新館講堂
○プログラム　　※日英同時通訳付

【基調講演】「オープンデータの潮流とEuropeana」
東京大学大学院情報学環 特任講師　生貝 直人 氏

【特別講演】「Europeanaの今後の展開：戦略計画2015-2020」
Europeana 執行委員、Collections Trust CEO　ニック・プール 氏

【事例報告Ⅰ】「国立国会図書館（NDL）サーチの今後の展開」
国立国会図書館 電子情報部電子情報サービス課課長補佐 小澤 弘太

【事例報告Ⅱ】「連携機関から見たNDLサーチ：今後への期待」
A)「まほろばデジタルライブラリー／ゆにかねっとでの連携」
奈良県立図書情報館　総務企画グループ主査　川畑 卓也 氏
B)「東寺百合文書WEBとオープンデータ化」
京都府立総合資料館　庶務課兼歴史資料課　福島 幸宏 氏
C)「J-STAGEとNDLサーチの現状と今後の展望」
科学技術振興機構　知識基盤情報部研究成果情報グループ 中島 律子 氏
D)「CiNiiとNDLサーチの現状と今後の展望」
国立情報学研究所　准教授 大向 一輝 氏

【パネルディスカッション】
「デジタル文化資源の収集・提供・活用の未来」
司　　会：同志社大学 教授 原田 隆史 氏

パネリスト：Europeana ニック・プール 氏
東京大学大学院 生貝 直人 氏
国立情報学研究所 大向 一輝 氏
国立国会図書館 電子情報部電子情報サービス課長 木目沢 司

○定　　員　300名 ※先着順
○参 加 費　無料
○申込方法　ホームページの「参加申込みページ」からお申し込みください。
国立国会図書館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）
＞イベント・展示会情報＞国際シンポジウム「デジタル文化資源の情報基盤を目指して：Europeanaと国立国会図書館サーチ」
URL　http://www.ndl.go.jp/jp/event/events/20150122sympo.html
○問合せ先
国立国会図書館 電子情報部 電子情報サービス課
電話　03（3506）5141
メールアドレス：ndl-search@ndl.go.jp

■ 資料のデジタル化に伴い原資料の利用を停止しています

国立国会図書館では劣化した資料の保存と利用の両立を図るため、デジタル化による媒体変換を行い、作業が終了した後は、原資料に代えてデジタル化資料を提供しています。

このデジタル化作業のため、東京本館で一部の資料の利用を停止しています。

利用者の皆様にはご不便をおかけしますが、国民の文化的資産である国立国会図書館の蔵書を、可能な限り長く保存し後世に伝えるため、ご理解とご協力をお願いいたします。

○利用停止対象資料　戦前・戦後期に刊行された和図書のうち、請求記号が026～921で始まる資料の一部　約450冊
○利 用 停 止 期 間　平成26年11月末から平成27年3月末まで（予定）
※ご来館の際は、NDL-OPAC（国立国会図書館蔵書検索・申込システム）で、ご希望の資料が利用可能かどうかを事前にご確認ください。
URL　http://ndlopac.ndl.go.jp/

■ 本の万華鏡（第17回）「日本のだし文化とうま味の発見」

平成25年12月、「和食；日本人の伝統的な食文化」がユネスコ無形文化遺産に登録されました。和食というと、まず寿司や天ぷら、味噌汁といった代表的な料理が思い浮かびますが、目立たない位置にありながら和食に欠かせない存在、それが「だし」です。

11月26日から提供を開始したミニ電子展示「本の万華鏡」第17回のテーマは「日本のだし文化とうま味の発見」です。「だし」の素となる食材の中でも、特に日本人の生活に深い関わりを持つ鰹と昆布を中心に、食品としての歴史や「だし」の発達、日本人の研究者によって発見された「うま味」について、国立国会図書館デジタルコレクションの資料を用いてご紹介します。

第1章では、「だし」以前という側面から、鰹と昆布の食品としての歴史、鰹節の発達と定着、縁起物としての扱いなどについてご紹介します。第2章では、江戸時代の料理本を中心に「だし」の発達の歴史や、東西の「だし」の違いについて見ていきます。また、コラムとして煮干しだしや椎茸だしに関する資料も一部ご紹介します。第3章では、明治41（1908）年に昆布の「うま味」がグルタミン酸に起因することをつきとめた池田菊苗の研究や、うま味調味料の商品化などについて、当時ならではのエピソードを交えてご紹介します。

○URL　http://www.ndl.go.jp/kaleido/entry/17/index.html

鰹の錦絵
広重［画］『広重魚尽』［江戸後期］

昆布を運ぶ様子
平瀬徹斎 編，長谷川光信 画
『日本山海名物図会5巻』塩屋卯兵衛［ほか］ 寛政9求板

「うま味」の発見者、池田菊苗の肖像
大幸勇吉 著『通俗化学対話』
富山房　昭和7

平成26年度 子ども読書連携フォーラム

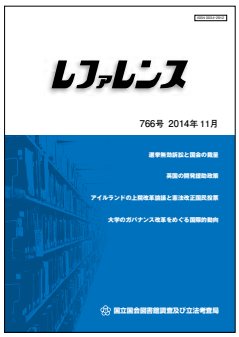
国際子ども図書館では、子どもの読書活動の推進に資するため、関係者間の情報共有と交流の場として「子ども読書連携フォーラム」を開催します。

今年度は、児童サービスの基礎である子どもの本の選書をテーマに、子どもの本、特に、小学生までを対象とした知識の本の選書業務の重要性を理解し、現状を把握するとともに、課題を探ります。

○テーマ　子どもの本の選書を考える―知識の本を中心に―
○日　時　平成27年3月2日（月）　13:00～16:00
○会　場　国際子ども図書館3階ホール
○対　象　公共図書館職員、学校図書館担当者、研究者、児童書出版者等
○定　員　80名。申込多数の場合は調整します。
○参加費　無料。ただし、旅費等は参加者の負担とします。
○申込期間　平成26年12月20日～平成27年1月31日
○申込方法　国際子ども図書館ホームページをご覧ください。
国際子ども図書館ホームページ（http://www.kodomo.go.jp/）
＞研修・交流＞関連機関との連携協力＞子ども読書連携フォーラム
＞平成26年度子ども読書連携フォーラム
URL　http://www.kodomo.go.jp/study/cooperation/forum2/h26.html
○問合せ先　国立国会図書館 国際子ども図書館 児童サービス課
電話　03（3827）2065（代表）
※フォーラムの詳細は、上記ホームページをご覧ください。

新刊案内

国立国会図書館の編集・刊行物



レファレンス　766号　A4　101頁　月刊　1,000円（税別）　発売　日本図書館協会

選挙無効訴訟と国会の裁量―衆議院の選挙区割りをめぐる最高裁平成25年11月20日大法廷判決を素材として―

英国の開発援助政策―援助額対GNI比0.7%の目標を達成した英国―

アイルランドの上院改革論議と憲法改正国民投票

大学のガバナンス改革をめぐる国際的動向―主要国の状況と我が国への示唆―

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033　東京都中央区新川1-11-14　電話　03（3523）0812

国立国会図書館月報　年間索引

平成26年(2014)1月号 〉〉 12月号　NO.634~645

凡　　例　記事ごとに掲載順に排列した。

記　載　例　国立国会図書館の平成26年度予算　（総務部会計課）　638　⑤　28-29

記事名　執筆者名　掲載号　掲載月　頁

今月の一冊

国立国会図書館の蔵書の中から、美しい本、珍しい本、面白いエピソードがある本を広く紹介。

鏡餅は語る　ある伯爵家のお正月	（葦名　ふみ）	634	①	4-5
生まれながらの調停者　安達峰一郎と常設国際司法裁判所	（樋山　千冬）	635	②	2-3
本朝名刺尽　『名紙譜』・「宇田川榕庵名刺」・『張交帖』～名刺の歴史をたどって～	（大沼　宜規）	636	③	2-3
民主社会党の誕生　中道政治の光芒	（堀内　寛雄）	637	④	2-3
子どものための百科図譜　19世紀ドイツの森羅万象	（檜山　未帆）	638	⑤	2-3
俳優楽屋双六　バーチャル楽屋見学の楽しみ	（伊藤　りさ）	639	⑥	2-3
『少年文友』第四号　少年投書家による地方同人誌（布川文庫の雑誌コレクションから）	（長尾　宗典）	640/641	⑦/⑧	2-3
江戸史蹟　江戸っ子旗本の東京案内	（中嶋　恵子）	642	⑨	2-3
クマグスからの手紙　白井光太郎宛南方熊楠書簡	（豊田　さおり）	643	⑩	2-3
日本イメージの伝達　長谷川武次郎の挿絵本	（大塚　奈奈絵）	644	⑪	2-3
トラスト王のコレクション・カタログ *Catalogue of the collection of watches, the property of J. Pierpont Morgan*	（石田　暁子）	645	⑫	2-3

一般記事

図書館界の最新情報、国立国会図書館の蔵書、サービス、業務などを紹介。

国立国会図書館の使命を着実に果たすために　平成26年の新年を迎えて	（大滝　則忠）	634	①	2-3
日本の子どもの文学―国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み　「児童文学者」コーナーから「21世紀の子どもの本」コーナーへ	（国際子ども図書館「日本の子どもの文学」展示班）	634	①	24-25
数字で見る国立国会図書館　『国立国会図書館年報　平成24年度』から	（総務部総務課）	634	①	26-27
特集　国会と国民をつなぐ―調査及び立法考査局		635	②	11-24
憲法とは―専門調査員に聞く	（棟居　快行）	635	②	12-16
読むと国政がわかる！―調査及び立法考査局の刊行物	（調査及び立法考査局調査企画課）	635	②	17-19
ウェブで調べる！国会情報	（調査及び立法考査局議会官庁資料課）	635	②	20-21
議会官庁資料室で調べる	（調査及び立法考査局議会官庁資料課）	635	②	22-24
記憶をつなぐ―東日本大震災関連資料の収集への取り組み	（大塚　奈奈絵）	636	③	4-7
電子展示会「錦絵でたのしむ江戸の名所」	（展示委員会電子展示小委員会）	636	③	26-29
国立国会図書館に集う、学ぶ、知る　音楽資料・情報、CADAL、東日本大震災アーカイブ―平成25年度実施イベントから		637	④	4-24

音楽・映像記録メディアの現状と課題、今後の展望　平成25年度音楽資料・情報担当者セミナーから（利用者サービス部音楽映像資料課）	637	④	5-11
中国の資料デジタル化プロジェクト―国際連携を進めるCADAL（関西館アジア情報課）	637	④	12-16
未来をつくる地域の記憶　東日本大震災アーカイブ国際シンポジウム（電子情報部電子情報流通課）	637	④	17-24
特集　子どもと本をつなぐ―国際子ども図書館の取り組み―	638	⑤	4-27
那須正幹さんに聞く―ズッコケ三人組からのメッセージ―（宮川　健郎）	638	⑤	6-15
IFLA児童・ヤングアダルト図書館分科会「絵本で世界を知ろうプロジェクト」と国際子ども図書館展示会「絵本で知る世界の国々」（飛田　由美）	638	⑤	16-19
国際子ども図書館・夏のイベントの事例紹介　夏休み読書キャンペーン（国際子ども図書館児童サービス課）	638	⑤	20-21
発掘！ 埋蔵文化財調査から見えた歴史―国際子ども図書館の新たな幕開けへ向けて―（安田　隆昭）	638	⑤	22-27
国立国会図書館の平成26年度予算（総務部会計課）	638	⑤	28-29
造本・装幀文化の保存と伝承　造本装幀コンクールと原装保存の意義（浜田　桂子）	639	⑥	4-9
図書資料の原装保存について（大塚　奈奈絵）	639	⑥	10-11
ビッグデータ時代の図書館の挑戦―研究データの保存と共有（利用者サービス部・電子情報部）	639	⑥	12-16
中高生への読書推進を考える　子ども読書連携フォーラムから（国際子ども図書館児童サービス課）	639	⑥	17-19
ようこそ、実験室へ　NDLラボの誕生・現在・未来（電子情報部電子情報サービス課次世代システム開発研究室）	640/641	⑦/⑧	4-5
本は知識への入り口　読み方を広げる「電子読書支援システム」（阿辺川　武）	640/641	⑦/⑧	6-8
高度情報化時代の知への貢献、皆様もいかがですか？ クラウドソーシングによる日本語資料のデジタル翻刻の試み（永崎　研宣）	640/641	⑦/⑧	9-11
パピルスからデジタルまで―フランス国立古文書学校の図書館員教育（大沼　太兵衛）	640/641	⑦/⑧	12-16
国立国会図書館にない本（続編）―戦前・占領期の雑誌を求めて（小林　昌樹）	640/641	⑦/⑧	17-19
なぜ国立国会図書館で「科学技術プロジェクト」なのか？ ―専門調査員に聞く（小林　信一）	642	⑨	4-10
新たな貴重書のご紹介　第48回貴重書等指定委員会報告（貴重書等指定委員会）	642	⑨	12-19
重要文化財指定資料紹介『弘安禮節』（利用者サービス部人文課）	642	⑨	20-21
関西館小展示関連講演会「日本にウイスキーづくりを伝えた男」（簑輪　陽一郎；関西館展示小委員会編集）	642	⑨	22-25
平成25年度国立国会図書館活動実績評価（総務部企画課）	642	⑨	27-29
憲政資料室の新規公開資料から（利用者サービス部政治史料課）	643	⑩	4-11
100万冊をあなたの街へ―図書館向けデジタル化資料送信サービスの現況（利用者サービス部サービス企画課、関西館文献提供課）	643	⑩	13-17
企画展示　あの人の直筆（展示委員会企画展示小委員会）	643	⑩	19-25
特集　国立国会図書館と脚本・台本	644	⑪	4-17
脚本・台本の収集について（大塚　奈奈絵）	644	⑪	4-5
脚本家　中園ミホさんインタビュー（総務部総務課編集）	644	⑪	6-11
放送番組制作の歴史をひもとく―脚本・台本の紹介と利用案内（利用者サービス部音楽映像資料課）	644	⑪	12-15
「市川森一の世界」を残し、伝える。―デジタル脚本アーカイブズとWARP―（関西館電子図書館課）	644	⑪	16-17
国立国会図書館東京本館を見学しよう（利用者サービス部サービス運営課）	644	⑪	19-21
図書館、市民、社会：知識の合流 世界図書館・情報会議 第80回国際図書館連盟（IFLA）年次大会（国立国会図書館IFLAリヨン大会代表団）	645	⑫	4-14
子どもの探究活動と図書館の可能性 ～「調べものの部屋」開室に向けた調査プロジェクト講演会から～（国際子ども図書館児童サービス課）	645	⑫	16-19

特別企画

阿刀田高インタビュー

本と読書の曲がり角―ふたたび図書館の現場から

作家、山梨県立図書館長の阿刀田高氏のインタビュー

第1回　図書館と私	634	①	6-14
第2回　高い民度を求めて	635	②	4-10

ようこそ、心躍るひとときへ
―蘆原英了コレクションの世界―

人文総合情報室で利用できる貴重なコレクションの紹介。

1. バレエ	（鬼塚　通子）	634	①	15-21
2. シャンソン	（長尾　宗典）	635	②	28-31
3. サーカス	（邊見　由起子）	636	③	20-25

世界図書館紀行

海外に派遣された当館職員が、現地で見た特色ある図書館を紹介。

クアラルンプール	（齊藤　まや）	639	⑥	20-26
カナダ議会図書館	（大迫　丈志）	640/641	⑦/⑧	20-26
イタリア　エミリア・ロマーニャ州の図書館	（渡邉　由利子）	643	⑩	26-33
ミャンマー	（白井　京）	644	⑪	22-29
ストックホルム	（平澤　大輔）	645	⑫	20-26

本の森を歩く

国立国会図書館の巨大な書庫の中から、毎回一つのテーマにそって蔵書を紹介。

第12回　3・11から生まれた本　続	（服部　恵久、澤井　優子、松永　しのぶ、村本　聡子、鈴木　麻央、中島　尚子）	636	③	8-17

本屋にない本

納本制度により収集した出版物の中から、主に取次店を通らず入手しにくい国内出版物を紹介。本誌創刊以来の連載。

『じょせつき 創立50周年記念社史』	（佐藤　菜緒恵）	634	①	23
『サークル誌の時代　労働者の文学運動1950-60年代福岡　2011年福岡市文学館企画展』	（安井　一徳）	635	②	26
『風雪の百年　チッソ株式会社史』	（諸橋　邦彦）	635	②	27
『東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会平成23年度活動報告書』『東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会平成24年度活動報告書』『語ろう！文化財レスキュー　被災文化財等救援委員会公開討論会報告書』	（竹内　秀樹）	636	③	18-19
『八千代座100周年記念誌　これまでの100年これからの100年』	（松井　美樹）	637	④	26
『読書推進運動協議会の50年　1959-2009』	（高宮　光江）	638	⑤	31
『生誕百年　新美南吉』	（坪井　伸樹）	638	⑤	32
『帝国劇場100年のあゆみ　1911-2011』	（都筑　志麻）	639	⑥	28
『図録桐生からくり人形芝居』	（田村　祐子）	640/641	⑦/⑧	28
『少女マンガの世界　原画’(ダッシュ) 10年の軌跡』	（吉間　仁子）	642	⑨	26
『高島屋美術部百年史　1909-2010』	（河合　将彦）	643	⑩	18
『外国映画に愛をこめて　外配協の50年』	（松永　しのぶ）	644	⑪	32
『図書館とともに　キハラ100年の歩み』	（長尾　宗典）	645	⑫	27

館内スコープ

館内の様々な業務を担当職員が紹介するコラム。

過去と未来をつなぐWARP	（電子図書館課ネットワーク情報第一係）	634	①	22
資料の海から最適な情報を　オーダーメイドの調査報告	（社会労働課）	635	②	25
愛すべき製本用具たち	（資料保存課保存企画係）	636	③	30
次世代システムはデイジー・ベルを歌うか？	（電子情報サービス課次世代システム開発研究室）	637	④	25
中高生に国際子ども図書館の案内をしています	（児童サービス課企画推進係）	638	⑤	30
書誌データの品質管理	（収集・書誌調整課書誌サービス係）	639	⑥	27
地図を探すための地図	（人文課地図係）	640/641	⑦/⑧	27
科学技術をわかりやすく	（文教科学技術課科学技術室）	642	⑨	11
「憲政資料室の新規公開資料から」まで	（政治史料課）	643	⑩	12
書庫の空調管理	（管理課施設運用係）	644	⑪	18
海外と日本をつなぐ！　国立国会図書館の国際協力活動	（支部図書館・協力課協力係）	645	⑫	15

TOPIC

国立国会図書館の新しいサービス、事業について詳しく紹介。

デジタル化資料のご利用について　著作権保護期間が満了したデジタル化資料の二次利用	（電子情報部電子情報流通課）	642	⑨	30-31
東日本大震災で被災した古文書「吉田家文書」の修復が終了しました	（収集書誌部資料保存課）	644	⑪	30-31

NDL News 最近の動き

当館にかかわる新しい動き、重要な会議等の報告。

法規の制定　【規程第3号】国立国会図書館職員定員規程の一部を改正する規程	634	①	28
平成25年度国立国会図書館長と行政・司法各部門支部図書館長との懇談会	634	①	28
国際政策セミナー「欧州におけるリージョナリズム－道州制論議への示唆－」	634	①	29
法規の制定　【規則第6号】国立国会図書館視覚障害者等用資料送信及び貸出規則 【規則第7号】国立国会図書館組織規則の一部を改正する規則 【規則第8号】国立国会図書館資料利用規則及び国立国会図書館国際子ども図書館資料利用規則の一部を改正する規則 【規則第9号】国立国会図書館中央館及び支部図書館資料相互貸出規則の一部を改正する規則 【告示第2号】複写料金に関する件の一部を改正する件	635	②	32-33
国立情報学研究所（NII）、科学技術振興機構（JST）、国立国会図書館（NDL）の3機関長による会談	635	②	33
平成25年度国立国会図書館長と大学図書館長との懇談会	635	②	33
おもな人事	637	④	27-28
平成25年度書誌調整連絡会議	637	④	28
法規の制定　【規則第1号】国立国会図書館組織規則の一部を改正する規則 【規則第2号】国立国会図書館事務文書開示規則の一部を改正する規則 【規則第3号】国立国会図書館資料利用規則の一部を改正する規則 【規程第1号】国立国会図書館職員定員規程の一部を改正する規程 【規則第4号】国立国会図書館展示会出品資料貸出規則の一部を改正する規則	638	⑤	33-34
韓国国立中央図書館との第17回業務交流	642	⑨	32

第4回科学技術情報整備審議会	642	⑨	33
平成26年度国立国会図書館長と都道府県立及び政令指定都市立図書館長との懇談会	642	⑨	34
法規の制定　【告示第1号】国立国会図書館法第二十五条の四第四項に規定する金額等に関する件の一部を改正する件	642	⑨	34
新副館長就任	645	⑫	28
おもな人事	645	⑫	28

お　知　ら　せ

新しいサービス、イベント、研修等のお知らせのほか、刊行物の新刊案内を掲載。

子どものための絵本と音楽の会	634	①	30
平成25年度アジア情報研修	634	①	31
「国立国会図書館デジタルコレクション」にリニューアルします	634	①	32
図書館向けデジタル化資料送信サービスを開始します	634	①	33
関西館小展示（第15回）「日本酒の近代化と洋酒の国産化」	634	①	34
国際子ども図書館展示会「子どもを健やかに育てる本2013－厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財（出版物）」	634	①	35
消費税率の引上げに伴う複写料金等の取扱いについて	635	②	34
雑誌記事索引がOCLCを通じて利用できるようになりました	635	②	34
平成25年度の利用者アンケートの結果を公表しました	635	②	35
平成26年度国立国会図書館図書館情報学実習生を募集します	636	③	31
平成26年度国立国会図書館職員採用試験	636	③	32-33
消費税率の引上げに伴う複写料金等の取扱いについて	636	③	33
国際子ども図書館展示会「絵本で知る世界の国々―IFLAからのおくりもの」	636	③	34
本の万華鏡（第15回）「もう一つの東京オリンピック」	636	③	35
日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム寄贈脚本の提供開始	637	④	29
東日本大震災に関する写真・動画の投稿、ウェブサイトの発見にご協力ください	637	④	30
東京本館「利用ガイダンス」	637	④	31
国立国会図書館データベース・ナビゲーション・サービス（Dnavi）はサービスを終了しました	637	④	31
国際子ども図書館講演会「きょうの絵本　あしたの絵本－希望のかたちを求めて－」	637	④	32
国際子ども図書館電子展示会「日本の子どもの文学－国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」提供開始	637	④	33
調査報告書『21世紀の地方分権―道州制論議に向けて―』『再生可能エネルギーをめぐる諸相』『再生可能エネルギーをめぐる科学技術政策』を刊行しました	637	④	34
『国際子ども図書館調査研究シリーズ』No.3を刊行しました	637	④	35
国際子ども図書館講演会「子どもの探究活動と図書館の可能性」	638	⑤	35
全国書誌（電子書籍・電子雑誌編）の提供開始	639	⑥	29
平成26年度の図書館員を対象とする研修	639	⑥	30-31
利用者アンケートご協力のお願い	639	⑥	32
中高生のための「国立国会図書館の仕事」紹介	639	⑥	33
国際子ども図書館夏休みイベント「科学あそび2014」	639	⑥	34
国際子ども図書館電子展示会「中高生のための幕末・明治の日本の歴史事典」提供開始	639	⑥	35
電子展示会「ブラジル移民の100年」をリニューアル公開	639	⑥	36
東京本館の資料の一部を関西館へ移送するため、資料の利用を一時休止します	640/641	⑦/⑧	29
利用者登録についてのアンケートご協力のお願い	640/641	⑦/⑧	30
本の万華鏡（第16回）「日本近代建築の夜明け～建築設計競技を中心に」	640/641	⑦/⑧	31
関西館小展示（第16回）「宇宙に夢中―古代の宇宙観から「はやぶさ」まで―」	640/641	⑦/⑧	32-33

国立国会図書館データベースフォーラム―遺跡研究から見る図書館とデータベース―（関西館）	640/641	⑦/⑧	34
平成26年度資料デジタル化研修	640/641	⑦/⑧	35
国際子ども図書館展示会「世界のバリアフリー絵本展2013―国際児童図書評議会2013年推薦図書展」	640/641	⑦/⑧	36
シリーズ・いま、世界の子どもの本は？（第8回）「いま、スペイン語圏の子どもの本は？」	640/641	⑦/⑧	37
平成26年度「国立国会図書館国際子ども図書館児童文学連続講座―国際子ども図書館所蔵資料を使って」	640/641	⑦/⑧	38
国際子ども図書館講演会「ドイツの児童文学作家クラウス・コルドン講演会　わたしの物語作法―古きベルリンの若者たち」	640/641	⑦/⑧	39
登録利用者情報の失効と更新	642	⑨	35
国立国会図書館データベースフォーラム（東京本館）	642	⑨	36
第16回図書館総合展に参加します	642	⑨	37
平成26年度レファレンス研修	642	⑨	38
平成26年度企画展示「あの人の直筆」	642	⑨	39
子どものための音楽会	642	⑨	40
登録利用者情報の失効と更新	643	⑩	34
国際シンポジウム「日仏交流の過去と現在―国立国会図書館・フランス国立図書館の所蔵資料から」	643	⑩	35
平成26年度東日本大震災アーカイブシンポジウム「4年目の震災アーカイブの現状と今後の未来（世界）へ繋ぐために」	644	⑪	33
平成26年度アジア情報研修	644	⑪	34
平成26年度法令・議会・官庁資料研修	644	⑪	35
年末年始のご利用について	644	⑪	36
電子展示会「近代日本とフランス―憧れ、出会い、交流」	645	⑫	29
国際シンポジウム「デジタル文化資源の情報基盤を目指して：Europeanaと国立国会図書館サーチ」	645	⑫	30-31
資料のデジタル化に伴い原資料の利用を停止しています	645	⑫	31
本の万華鏡（第17回）「日本のだし文化とうま味の発見」	645	⑫	32
平成26年度子ども読書連携フォーラム	645	⑫	33
新刊案内　国立国会図書館の編集・刊行物	毎号		

『国立国会図書館月報』のご購入については、公益社団法人 日本図書館協会へお問い合わせください。
バックナンバーも取り扱っております。
〒104-0033　東京都中央区新川1-11-14　電話　03（3523）0812（販売）

NATIONAL DIET LIBRARY MONTHLY BULLETIN

No.645 12 December 2014

CONTENTS

02 <Book of the month - from NDL collections>
Catalogue of the collection of watches, the property of J. Pierpont Morgan

04 Libraries, Citizens, Societies: Confluence for Knowledge
World Library and Information Congress: 80th IFLA General Conference and Assembly

16 Children's inquiry activities and potential of library
Lecture on research projects for opening of Teens' Research Room at the International Library of Children's Literature (ILCL)

20 Travel writing on world libraries: Stockholm

15 <Tidbits of information on NDL>
Linking Japan and the world: NDL's International Cooperation

27 <Books not commercially available>
Toshokan to tomoni: Kihara 100nen no ayumi

28 <NDL News>
○New Deputy Librarian
○Changes in personnel

29 <Announcements>
○Digital exhibition "Modern Japan and France - adoration, encounter and interaction"
○International Symposium: Toward creating an information infrastructure for digital cultural resources—Europeana and NDL Search
○Discontinuance of original materials reader service because of digitization
○Kaleidoscope of Books (17) "*Dashi* culture of Japan and discovery of *umami*"
○Forum for cooperation on children's reading FY2014
○Book notice - Publications from NDL

35 Annual index to *National Diet Library Monthly Bulletin,* nos. 634 - 645

国立国会図書館月報

発行所 国立国会図書館
編集責任者 小寺正一
〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03（3581）2331（代表）
FAX 03（3597）5617
E-mail geppo@ndl.go.jp

平成26年12月号（No.645）
平成26年12月20日発行 定価540円
（本体500円）

発売 公益社団法人日本図書館協会
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03（3523）0812（販売）
FAX 03（3523）0842
E-mail hanbai@jla.or.jp

印刷所 株式会社 ブルーホップ

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ（http://www.ndl.go.jp/）＞刊行物＞国立国会図書館月報でご覧いただけます。

表紙・本文 中性再生紙使用

『浴泉譜 版畫』から「別所　長野縣」
前川千帆 画　アオイ書房　昭和16（1941）
1冊　41×31cm
「国立国会図書館デジタルコレクション」でご覧になれます
（館内限定）

国立国会図書館月報

平成26年12月20日発行（毎月1回20日発行 12月号通巻645号）

発売：公益社団法人 日本図書館協会　定価540円（本体500円）

雑誌 03919-12

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。